

目的 既製服は、左右対称型に作られている。これにはいろいろの問題が考えられるが、一つには対称型である被服のなかに円筒型の身体を入れることにより、機能量やデザインなどでカバーされ、人間における対称性の表現が可能になる。つまり人体の非対称性は、被服においては検討する必要はないという考え方も成り立つ。しかし実際には仮縫いにおいて左右差に関する配慮はなされており、被服構成学的立場から、これをいかに理論づけたらよいのかを考察するため本実験を行った。

方法 実験対象は健康な、成人女子(30~64才)・大学生女子(19~22才)・高校生女子(16~18才)各100名、計300名とし、紐付き型スリッパを着用し、直立正常姿勢で測定した。測定期は昭和45年7月~46年9月である。測定項目は、肩幅・肩傾斜角度・腕付根囲・上腕最大囲・身長・体重である。使用器具は、鋼鉄製メジャー・人体角度計・マルチン氏式身長計・体重計を用いた。

結果 肩幅の左右の差は、各年齢層とも、ほぼ正規分布に近い形を示している。肩傾斜角度の差は、大学生女子・高校生女子は正規分布に近い形を示しているが、やや右よりの分布を示し、成人女子は分布が左に偏している。腕付根囲は、各年齢層ともに右大が多く、成人女子よりも大学生女子・高校生女子に個人差がみられる。上腕最大囲も各年齢層とも右が大で腕付根囲より、差の範囲がせまくなっている。腕付根囲・上腕最大囲ともに成人女子は、左右差が大きい。